

寒川鼠骨編「模範滑稽俳句評釈」を読む（三）

八塚一青

前稿で私は最良の滑稽俳句は「明るさ×風情」の融合だと思うと書きました。しかしこの「風情」を言葉にするのはとても難しいものです。それこそが「詩」そのものと言っていいかもしれません。あくまで私の考えですが、人間の体はほとんどが水でできています。その人の中にある水が「ゆらぐ」瞬間、「何かある」という感覚、それが詩であると思っています。

「模範滑稽俳句評釈」から芭蕉と子規の句を引きます。これらは鼠骨によって並べて引かれています。

渋柿や一口は食ふ猿の面	芭蕉
柿熟す愚庵に猿も弟子もなし	子規

後世の子規が芭蕉の句を意識して詠んだことは間違いないでしょう。芭蕉句について鼠骨は「渋柿という事を知らないで食うて渋いのに驚きあわてて捨てたという刹那の趣がいかにも滑稽である」と評しています。一方、子規句について鼠骨は「猿と弟子とを並べたのが人間と動物とを同じ様に見たので、いささか滑稽である」と「いささか」（ほんの少し）という言葉を使っています。芭蕉は「いかにも滑稽」、子規は「いささか滑稽」、この評釈にふたりの滑稽感が出ている気がしてなりません。

芭蕉の晩年に到達した俳諧の理念に「軽み」があります。この「軽み」は、もうひとつの芭蕉の言葉「高く心を悟りて俗に帰るべし」によく現れています。目を耳を心を澄ませて、日常の中にある何か（詩）を捉える。それを素直に言葉にすれば「いかにも滑稽」なものができあがるが多々あります。

一方、子規は、「滑稽」を俳諧・俳句の重要な要素のひとつと考えていましたが「俳句は滑稽のうちに品格あり趣味あるを要す」と語っているように、少し理屈が入っています。別の言葉では「雅味ある滑稽」とも語っているように、少々、作意が入ってしまう隙が生まれています。芭蕉が「滑稽」を見つけるのと、子規が「滑稽」を作るのでは、できてくる「滑稽」の質感が違います。

菜畑に花見顔なる雀かな

芭蕉

この句についての以下の鼠骨の評釈が美しいです。「(雀が)人間のごとく情けありて、菜の花を美しと見て感にうたれたような顔をしているという所に淡い上品な滑稽味を覚えるのである。芭蕉の滑稽はいつも上品なのは感心である」。子規の言葉にある「品格あり趣味あるを要す」を自然に満たしているのはこの俳聖の人間性によるものでしょう。

子規は明るい性格。陽の人でした。自分の性格を誰よりも心得ていたので、句作において羽目を外すことを自制していた節があります。

お釈迦様の尻未だ青き産湯哉

子規

本当はもっと言いたかったのですが、「品格」を保とうと口を押さえている子規の姿が浮かびます。

最後に寒川鼠骨について触れておきたいことがあります。ネットで鼠骨を調べると、昭和二十九年八月九日の写真がでてきます。鼠骨はその九日後に亡くなっているのので、亡くなる直前の写真と思われます。この写真の鼠骨の淡い笑顔がとても良いのです。

寺の庭に落ち散る木の実掃はざる

鼠骨

滑稽と風情を愛した俳人が、心より楽しんで編んだのが、「模範滑稽俳句評釈」なのです。